

県内巡回展示を通して行う地域連携

岩手県立博物館	学芸員	望月 貴史
岩泉町教育委員会	社会教育室長	田鎖 康之
大船渡市立博物館	係長	白土 豊
久慈琥珀博物館	リーダー	工藤 彩
三陸ジオパーク推進協議会	主任ジオパーク推進員	関 博充
国立科学博物館	連携推進課係長	濱村 伸治

1. はじめに

平成28年度、岩手県立博物館では国立科学博物館との共催で、企画展「国立科学博物館・コラボミュージアム in 盛岡 古生代の大量絶滅と回復ー進化の影と光ー」を行った。その後、「国立科学博物館・巡回ミュージアム in 岩手 進化の影と光ー古生代の大量絶滅と回復ー」と名称を改め、沿岸部を中心として岩手県内において巡回展示を行った。

今回は、県内巡回展示を通して行った地域連携と、それによって得られた成果や知見、浮かび上がった課題点について紹介する。

2. 国立科学博物館・巡回ミュージアム in 岩手 進化の影と光ー古生代の大量絶滅と回復ーについて

1) 展示自体のコンセプトについて

古生代から中生代の間に生じた3回の大規模な大量絶滅において、各時代でどのような生物たちが絶滅したのか、どのような原因によって大量絶滅が生じたと考えられているのか、大量絶滅が起きた後にはどのような生物が出現し繁栄したのか、それぞれの時代と岩手県との関わりについて、の4点について実物の化石を展示しながら紹介した。

また、現在起きつつある「生物大量絶滅」についても併せて紹介し、日本国内および岩手県内における絶滅種や絶滅危惧種についても展示を行った。

展示を通じて、このような貴重な地層や化石が岩手県から産出されること、様々な自然が岩手県にもあったことなどを、県民および外部に改めて発信し、改めて岩手県の貴重な財産を知ってもらうことをねらいとした。

2) 国立科学博物館・巡回ミュージアムについて

国立科学博物館では、地域博物館におけるネットワーク形成づくりを推進し、地域のレガシーを残すため、従来の標本資料等を活用した巡回展示に加えて、研修や学習プログラムを総合的に組み合わせた連携協働事業「国立科学博物館・巡回ミュージアム」を今年度から開始した。

「巡回事業をきっかけに、博物館等をつなぐ」をコンセプトに、巡回を通じた学芸員同士のつながりの構築・充実への貢献や、「教員のための博物館の日」事業の新規展開による博物館と学校との橋渡し等を目指している。

3) 展示会場および会期

巡回展示を行った岩手県内の会場及び会期は下記のとおり。

盛岡会場：岩手県立博物館 平成28年6月7日～8月21日（76日間）※1

岩泉会場：岩泉町民会館 平成28年8月27日～9月11日（16日間）※2

大船渡会場：大船渡市立博物館 平成28年9月16日～12月4日（80日間）

久慈会場：久慈琥珀博物館 平成28年12月9日～29年2月26日（80日間）※3

※1：「国立科学博物館・コラボミュージアム in 盛岡」として実施

※2：8月30日の台風10号の被災により、ほとんどの期間閉鎖

※3：平成29年1月現在開催中

3. 会場ごとの特色ある展示ー進化する展示ー

1) 巡回展示を行う意義

今回は、岩手県立博物館で行われた企画展「国立科学博物館・コラボミュージアム in 盛岡 古生代の大量絶滅と回復ー進化の影と光ー」をベースとして、岩手県立博物館と国立科学博物館所蔵の標本を、各展示会場のスペースに合わせて規模を縮小して巡回展示を行った。

その一方で、各会場では展示のコンセプトに合わせて、各施設所蔵の地域ならではの標本の追加や地域の特性を活かしたイベントを実施した。これによって、単に同じ展示標本が県内各所を周るだけの巡回展示に終止せず、会場ごとに異なる展示やイベントを楽しむことができ、さらに既に他会場で展示を見学していても、また別の会場に訪れる楽しみを持てる巡回展示を目指した。

各会場での具体的な展示、イベントについては下記のとおり。

2) 盛岡会場：岩手県立博物館

400点を超える化石・現生生物標本の展示を行い、各時代に生じた大量絶滅で絶滅した生物や、岩手県に関連する大量絶滅の地層や産出した化石等について展示した。

また、実物化石を用いたハンズオン標本の充実や、児童参加型の塗り絵シールを使った展示、夏休み期間中の子ども向け展示解説会の実施など、親子で楽しめる企画展示を行った。

さらに、会期中には岩手県立博物館学芸員の望月による「生命史をひも解くーオルドビス紀・シルル紀ー」、東京大学大学院理学系研究科の高橋聡氏による「岩泉に眠る古生代ー中生代の境界地層」と題した講演会を行った。また、岩手県内の教員向けに「教員のための博物館の日」を開催し、企画展の展示解説会やバックヤードツアー、意見交換会等を行った。



子ども向け展示解説会の様子

3) 岩泉会場：岩泉町民会館

展示標本総数は盛岡会場から減らした（約100点）ものの、岩泉町で1978年に見つかった日本初産出の恐竜化石「モシリユウの上腕骨（レプリカ）」を始めとした、岩泉町産の絶滅生物の化石（アンモナイト「プロテキサニテス（レプリカ）」、二枚貝「プテロトリゴニア」、植物「クラドフレビス」）など、岩泉町にゆかりのある標本を加えて展示を行った。

また、台風10号の被災によって実現はしなかったが、上述の高橋氏による講演会「岩泉の地層から読み解く地球の歴史」に加え、岩泉町安家に見られる古生代末の大量絶滅の地層（P-T境界層）の現地見学会を企画していた。また、その他のイベントとしては、展示解説会及び化石のレプリカ作りを行う予定であった。



岩泉会場の展示風景

4) 大船渡会場：大船渡市立博物館

岩泉会場の展示標本に加えて、独自の標本としては大船渡市立博物館および、2011年3月の東北地方太平洋沖地震によって被災した陸前高田市立博物館所蔵の四放サンゴ化石2点を「2つの化石の再会」として展示に加えた。

会期中には3Dデジタルコンテンツを利用した体験学習「恐竜3Dぬりえ」や、気仙地区理科教育研究会の研修会を実施した。



大船渡会場の展示風景

5) 久慈会場：久慈琥珀博物館

巡回展示の最後の会場となる久慈琥珀博物館では、独自の標本として久慈琥珀博物館敷地内の琥珀発掘体験現場付近で産出した恐竜化石標本3点を追加した。

その他の会期中のイベントとしては、展示解説会を実施したほか、巡回展示を利用した三陸ジオパーク推進協議会のスタッフおよび学校教員等教育関係者を対象とした研修会や化石のレプリカ作りを実施した。また、体験学習「恐竜3Dぬりえ」の実施も予定している。



久慈会場の展示風景

4. 展示会場以外での地域連携

1) 三陸ジオパーク推進協議会との連携

「三陸ジオパーク」は、三陸地域のジオサイトを通してその成り立ちを学ぶことや、ジオサイトを活かした観光活動によって三陸地域の魅力を知ってもらうこと等を目的として平成25年に日本ジオパークとして認定されたジオパークであり、その範囲は青森県八戸市から岩手県沿岸を縦断し、宮城県気仙沼市にまで及ぶ。

今回の巡回展示では展示会場となった4施設のほかにも、三陸ジオパークを統括する三陸ジオパーク推進協議会（宮古市）と協力して、より広い範囲に向けて地域連携を呼びかけた。

2) 三陸ジオパーク関連施設を含めたシールラリーの実施

各施設での展示見学に加えて、三陸沿岸地域に存在する貴重な地質、自然、環境に興味を持ってもらうことを目的とし、展示を実施した4会場（※1）に加えて三陸ジオパークの主要拠点施設となっている八戸市博物館・八戸ポータルミュージアムはっち（青森県八戸市）、浄土ヶ浜ビジターセンター（宮古市）、釜石市立鉄の歴史館（釜石市）、唐桑半島ビジターセンター（宮城県気仙沼市）の5施設において、本巡回展示オリジナルキャラクターを利用したシールラリーを実施した。（※1：被災により、岩泉会場では設置を見送った。）

参加者は、各施設に設置されたシールを台紙に貼りながら集め、3施設のシールを集めた段階でプレゼント（久慈琥珀製「琥珀の缶詰」）をもらうことができるという企画である。



シール台紙（完成版）

対象地域が三陸海岸（青森県八戸市～宮城県気仙沼市）であるため、岩手県にとどまらない広範囲におよぶ企画となったが、県内外から多くの参加者が訪れ、12月の段階で3ヶ所以上を周った「達成者」は30名以上にのぼった。



盛岡会場での設置の様子

3) 化石レプリカづくり研修会の実施

久慈会場では、三陸ジオパーク関連団体スタッフ、学校教員等教育関係者等を対象とした化石レプリカづくり研修会を実施した。参加者がレプリカ作りの基礎的な手順をマスターし、あわせて、レプリカを活用した事業やその他の製作方法などについても情報共有することで、ジオパークの活動におけるスキルの向上と各団体におけるジオパーク関連事業の充実を目的として実施した。

4) 教員のための博物館の日の実施

教員に博物館をより親しく感じてもらう取組である、「教員のための博物館の日」については、被災後ということもあり、東北地方ではあまり行われてこなかった。学校と博物館との連携については今後の課題でもあり、今回の展示を機に、教員に声かけを行って岩手県立博物館において夏季に小規模な教員対象の事業を実施した。展示解説、バックヤードツアーなどで博物館に親しんでもらうほか、学校の教員との意見交換などを行った。この時は自然史系の学芸員のみで対応をしているが、その実績を踏まえて、12月に改めて「教員のための博物館の日」を開催した。これは人文系の学芸員も含めた全館的な取り組みとなり、学校教員、大学生等20名の参加者があった。学校とのつながりだけでなく、これまでつながりの少なかった地元の大学とのつながりが新たにできるという効果も生まれ、来年度以降の実施も検討している。

5. 巡回展示を通して得られた成果・浮かび上がった課題点

1) 巡回展示の実施について

本巡回展示の特徴の一つである、「巡回先で展示標本を加えることによって作られる地域ごとに特色のある巡回展示」は一定の成果を上げることができた。実際に、岩泉会場を訪れた小学生の親子連れが久慈会場で行われた展示解説会に参加する姿も見られ、展示を通じた地域連携という役割を果たすことができた。

また、実現はしなかったが、岩泉会場で予定していた展示標本に関連した地元の地層観察会の実施は、展示を観て得た知識について実際の露頭を現地で観ることで再確認でき、地域

の地質や自然について理解を深めるきっかけを作ることができるものと考えている。さらにこうした観察会は、今後同様の巡回展を行う際にも地域ごとの特色を活かしたイベントの一つとして、館内活動と地域とを結びつけることができる可能性を秘めている。

一方で今後の課題点としては、巡回やイベントに係る費用が高額になるため、予算が確保できる施設でないと実施することができないという点が挙げられた。また来館者の目線から見た時に、巡回展示では普段その施設で観ることができない標本（恐竜の全身骨格など）を観たいという欲求もあるため、各施設独自の標本を追加する際には「なぜその標本が貴重なのか」「その地域の特別性はこういったところにあるのか」といった見せ方が重要になってくるものと思われる。

2) 三陸ジオパークとの連携について

今回の巡回展示で行ったシールラリーは、参加者に三陸沿岸を中心としたさまざまな場所にある施設をめぐるきっかけを提供することができた。実際に参加者を対象に行ったアンケートでは、アンケートに答えた31名中17名が少なくとも1つ以上の施設を初めて訪れたと回答した。また、参加者の居住地もさまざまであり、同アンケートに回答した31名中16名が岩手県外からの参加者であった。

シールの配布場所は三陸沿岸地域が主であったため、3ヶ所以上の施設を周った参加者が訪れた場所は必然的に三陸沿岸の施設が多かったが、内陸に位置する岩手県立博物館を訪れてシールを受け取った参加者も少数存在した。さらに、3ヶ所以上を周った参加者のうち、巡回展示を行った会場を訪れることなくシールを集めた参加者は4名のみであった。

これらのことは、巡回展示に付随して実施した今回のシールラリーが、展示を行った会場を訪れるきっかけを作るのに有効なだけでなく、巡回展示会場でシールラリーの存在を知った参加者が遠く離れた他地域の施設を周るきっかけを作るのに有効であることを示している。

一方で課題点としては、施設によっては館内燻蒸期間や冬期間などの特定期間には営業を行っていない場所もあるために配布期間が限られてしまうなど、施設ごとに足並みが揃わないこともあるということが挙げられる。

化石のレプリカづくり研修会については、参加者がスキルを習得し、各施設で保有する化石を使ったイベント等の支援を行うことが直接的なねらいである。一方で岩手県は広く、一回の事業で参加できる人数は限られている。巡回事業にあわせて、今回は国立科学博物館が講師を行ったが、来年度以降は、今回の参加者が中心となることで同様の研修会を県内で自主的に検討できるようになる。また、このような研修を実施することで、県内に技術的なものが広がるだけでなく、研修を通じた博物館やジオパーク等の地域諸団体とのネットワークを広めていくことが期待され、協力関係のモデルのひとつとなるものと考ええる。

教員のための博物館の日についても、岩手県内での実施はまだ少ないため、県立博物館での実施事例を参考に、学校と博物館の連携について県内の博物館で情報共有していきたい。

6. おわりに

今回実施した巡回展示は、展示を通して岩手県内の施設と地域の連携を深めるために有効であることが示された。また、三陸ジオパーク推進協議会と協力して行ったシールラリーは、巡回展示を行った会場のみならず、そのほかの施設を訪れるきっかけを作るのに非常に有効であることが示された。

また、こうした試みは岩手県内で実施した今回の巡回展示のみならず、将来的にほかの地域で行う同様の展示においても応用することが可能であり、地域ごとの特性を活かしながらさまざまな形で巡回展示を行うことができるものと考えられる。